

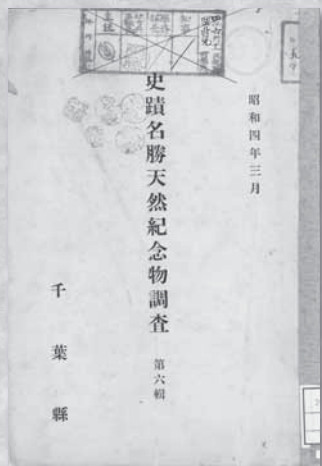
# 香取遺産

Vol.97

白幡古墳群

昭和3年に発掘調査を  
実施した石棺

圓生涯学習課 ☎(50)1224



▲史蹟名勝天然記念物調査  
第六輯



▲調査中の石棺。  
内部の様子がうかがえる

白幡古墳群は、大戸字白幡の台地にあります。現在、墳丘は削られ残ってはいませんが、前方後円墳、円墳が30基以上あります。

昭和3年(1928)に、円墳のものと思われる石棺1基が、耕作中に偶然発見されました。当時、官幣大社香取神宮付近の史跡踏査中であつた考古学の研究者吉田文俊氏が発掘調査を実施しました。

調査報告は、翌年に千葉県が刊行した『史蹟名勝天然記念物調査』第六輯にあります。報告によると、石棺は、秩父青石16枚を長方形に組み合わせたもので、内部の寸法は、長さ約206cm、幅約76cm、深さ約64cmです。組み合わせの枚数は、側面に3枚と4枚、前後に各1枚、底部に5枚、蓋に2枚でした。石材の継ぎ目には粘土を詰め、さらに石棺自体も厚さ9cmから15cmの粘土で包んでいました。石棺内からは、琥珀製棗玉やガラス玉などの玉類が100個以上、金環6個、鉄

鍔14本、刀子1本、直刀8本とかなり豊富な副葬品が出土しました。残念ながら、現在遺物の所在は不明です。

被葬者は、少なくとも女性1人、子ども1人を含む3人であつたことが、報告文と白幡古墳石棺平面略図からわかります。3人は、整然と横並びに埋葬されており、おそらく、両親とその子どもであつたことは、想像に難くありません。

石棺の石材は、秩父青石と書かれており、当地域ではあまり使用されない秩父山系を産地とする緑泥片岩と思われまふ。このことは、本古墳群を考ふる上で重要な情報です。昭和3年という古い発掘調査ではありますが、このように調査記録が残されていること自体、地域の遺産と言えるでしょう。

発掘調査の跡地には、『史蹟白幡古墳址、昭和四年三月三十日千葉県香取郡東大戸村建之』の石碑が残されています。